

令和 4 年 5 月 27 日現在

機関番号：32519

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K11257

研究課題名(和文) 認知症のアートセラピーに焦点を当てた日本語版評価尺度の開発と信頼性・妥当性の検証

研究課題名(英文) Development of a Japanese Observation Tool with Focus on Art Therapy for Dementia and Its Reliability and Validity

研究代表者

川久保 悦子 (Kawakubo, Etsuko)

城西国際大学・看護学部・准教授

研究者番号：30614698

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：目的：The Greater Cincinnati Chapter Well-Being Observation Tool(GCCWBOT)の日本語版尺度を作成し、信頼性と妥当性の検証を行う。方法：軽度から中等度の認知症を有する高齢者37名が6種類のビジュアルアートセラピーを行っているビデオを作成した。評価者40名はビデオを視聴しながら割り当てられたシーンを日本語版尺度で評価した。結果：のべ105名の研究データを用いた。日本語版尺度全体のCronbachの係数は0.852と高い内的一貫性が得られた。構造的妥当性を確認した。考察：日本語版The GCCWBOTの信頼性と妥当性は確認できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

認知症高齢者を対象としたビジュアルアートセラピーの心理的効果を評価する適切な尺度は海外で広く使用されているが、日本には適切な尺度ない。日本語版The Greater Cincinnati Chapter Well-Being Observation Tool(GCCWBOT)を開発したことにより、ビジュアルアートセラピーなどのアクティビティケアにおいて認知症高齢者のwell-beingを尊重した評価が進むことが期待される。

研究成果の概要(英文)：Aim: The aim of the present study was to develop a Japanese version of The Greater Cincinnati Chapter Well-Being Observation Tool (GCCWBOT), and to confirm its reliability and validity. Methods: A total of 37 elderly patients with mild to moderate dementia participated in six types of visual art therapy sessions, and sessions were recorded on a video. A total of 40 raters evaluated preassigned scenes while watching the recorded video. The raters practiced evaluating using the Japanese version of the GCCWBOT to assess the condition of the elderly dementia patients. Results: The Total number of subjects were 105. Cronbach's coefficient for the entire Japanese version of the GCCWBOT was 0.852, indicating high internal consistency, and confirming the configuration concept validity. Conclusions: The Japanese version of the GCCWBOT was developed, and its reliability and validity were confirmed.

研究分野：高齢者看護学

キーワード：高齢者 アートセラピー アクティビティ 認知症 QOL 再現性

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

認知症の行動・心理症状 (BPSD) の進行は、自発性の低下や感情表出の減少など、自己内面的な価値が失われていく。生活の質 (QOL) や well-being に大きな影響を与える。認知症の行動心理症状に対して第一選択薬は、非薬物療法である。歴史的に、アートセラピーにおける drawing や painting は、精神医学および心理的の専門家において、とくに有益な治療法であると報告されている (Magierski et al., 2020.)。海外では、認知症高齢者を対象としたビジュアルアートセラピーの心理的効果を評価するための尺度である The Greater Cincinnati Chapter Well-Being Observation Tool (以下 The GCCWBOT) が開発され (Kinney & Rentz, 2005)、アートセラピーにおけるもっともポピュラーな尺度となっている。The GCCWBOT は、Lawton (1997) の psychological well-being の概念を基盤に作られた尺度であり、Interest、Sustained attention、Pleasure、Negative affect、Sadness、Self-esteem、Normalcy の 7 領域の 19 指標で構成されている。ビジュアルアートセラピーに参加している認知症高齢者の状態を、評価者が 10 分間隔で観察し、評価を行うものである。海外では The GCCWBOT について、認知症高齢者のビジュアルアートセラピーを測定するのに有用な尺度であると報告されている (Alger et al., 2016; Windle et al., 2018) 。

しかし、日本ではビジュアルアートセラピーの効果を測る適切な尺度がなく (川久保, 2013) 心理的 well-being に焦点を当てた評価がされていない。

2. 研究の目的

日本語版 The GCCWBOT を開発し、その信頼性、妥当性を検証する。

3. 研究の方法

(1) 翻訳の手順

原作者の Kinney と Rentz 氏に翻訳許可を得た。英語版 The GCCWBOT の質問項目の意味を理解するために、看護学研究者 2 名が別々に日本語に翻訳し、共同で概念の検討をした。日本人バイリンガルによるの検討。看護研究者 2 名と異言語尺度開発研究の経験のある研究者 3 名で概念の検討をした。外国人翻訳家に依頼し日本語から英語への反訳を行った。看護研究者と異言語尺度研究者による内容妥当性の検討をした。

(2) 参加者の手順

2019 年 6 月～8 月に A 県の介護保険施設 3 か所に居住および通所する軽度～中等度 (CDR 2) の認知症高齢者計 37 名にアートセラピーを週に 1 回、6 回実施した。アートセラピー中の高齢者のようすをビデオに撮り CD を作成した。

(3) プレテスト

5 名の学生を評価者として、作成したアートセラピーに参加している高齢者のビデオ CD を視聴し、日本語版 The GCCWBOT で評価して、使用に関する意見を伺った。日本語版 The GCCWBOT の使用マニュアルを作成した。

(4) 評価者の手順

2020 年 8 月～9 月に B 大学に在籍する看護学部学生 40 名を評価者として募り、高齢者 1 名につき 2 名の評価者を割り当てた。評価者は、割り当てられた高齢者のビデオ CD を視聴しながら、日本語版 The GCCWBOT で評価した。

(5) 倫理的配慮

群馬大学人を対象とする医学系研究倫理審査会の承認を得て実施した (HS2018-200)。

4. 研究成果

(1) 結果・考察

信頼性：日本語版 The GCCWBOT の全体の Cronbach の係数は 0.852 と高い内的一貫性が得られた (表 1)。再テスト法による Intra-rater (同一評価者間) 信頼性の検討では、7 つの領域の Person の相関係数は 0.900～0.704 で、有意な強い正の相関を確認できた。Inter-rater (2 評価者間) 信頼性 (表 2) の検討では、2 評価者間の 7 つの領域の級内相関係数 ICC は 0.292～0.590 であった。日本語版 The GCCWBOT においても、評価者間信頼性は、英語版 The GCCWBOT の結果と同様に軽度～中等度であった。今後は、使用マニュアルの修正や練習ビデオの改良を行い、評価者間信頼性を更に高める予定である。

妥当性：7 つの領域の因子分析 (表 3) では 2 因子が抽出され、第 1 因子を “Well-Being”、第 2 因子を “Ill-Being” と命名した。この結果は、英語版 The GCCWBOT の因子分析の結果と一致し、日本語版 The GCCWBOT の構造的妥当性が確認された。

日本語版 The GCCWBOT の使用：日本語版 The GCCWBOT を用いて、ビジュアルアートセラピーに参加している認知症高齢者の状態を評価すれば、高齢者の情動の変化を注意深くとらえることができる。そして、高齢者の well-being を尊重した評価ができると期待される。「否定的感情」「悲しみ」に天井効果が認められたが、オリジナルの英語版 The GCCWBOT では報告されていなかった。この点については、更に研究を進める必要がある。

(2)結論

日本語版 The GCCWBOT を作成し、その信頼性・妥当性を確認した。日本語版 The GCCWBOT を普及させることにより、ビジュアルアートセラピーなどのアクティビティケアにおいて、認知症高齢者の心理的 well-being を尊重した評価が進むことが期待される。

表 1. 各領域の信頼性

			Cronbachの係数
Total			0.852
Well-Being			0.889
喜び		喜び 1	0.894
		喜び 2	
		喜び 3	
関心		関心 1	0.860
		関心 2	
		関心 3	
自尊心		自尊心 1	0.881
		自尊心 2	
		自尊心 3	
正常		正常 1	0.828
		正常 2	
		正常 3	
持続的注意		持続的注意1	0.752
		持続的注意2	
		持続的注意3	
Ill-Being			0.846
悲しみ		悲しみ 1	0.881
		悲しみ 2	
否定的感情		否定的感情 1	0.661
		否定的感情 2	
		否定的感情 3	

表 2 . 各領域の 2 評価者間の信頼性

7カテゴリーの質問項目				差の絶対値 が 1以下の割合	級内相関係数	p値
	平均値	最小値	最大値			
喜び	0.713	0.000	2.630	100.0%	0.581	< 0.001
関心	0.573	0.000	2.330	100.0%	0.590	< 0.001
自尊心	0.706	0.000	2.670	100.0%	0.570	< 0.001
正常	0.820	0.000	2.750	100.0%	0.455	0.001
持続的注意	0.443	0.000	1.750	100.0%	0.367	0.010
悲しみ	3.662	2.500	4.000	100.0%	0.292	0.040
否定的感情	3.844	2.580	4.000	100.0%	0.502	< 0.001

表 3. 日本語版 The GCCWBOT の 7 領域の因子分析

		n=105		
Domain	指標	因子 1	因子 2	
喜び	1.活動中、安心してくつろいだ動作、表情をしており、微笑んだり笑ったりする。	Well-Being	0.840	0.258
	2.「心地よいです」「くつろげます」といった表現や、微笑んだり目を細めるなどくつろいだ表情を伴い「うん」「ああ」などの判別できない発声によって、喜びの感覚を言語表現する。			
関心	1.活動が始まると、他の参加者に対して関心を示す。		0.810	0.193
	2.参加している仲間が活動に加わるよう、自ら進んで視線を合わせたり、微笑んだり、相手を見つめたり、あるいは言葉をかけたりといった行為のいずれか、あるいはすべてを用いて、働きかける。			
	3.仲間からの助けに対して、視線を合わせたり、微笑んだり、言葉で表わしたり、手ぶりといった行為のいずれか、あるいはすべてを用いて応える。			
自尊心	1.プロジェクトに参加し最後までやり抜いた満足感を、微笑む、嬉しそうにうなづく、目を潤ませる、手を叩くなどして、非言語的に表現する。		0.784	0.286
	2.活動をうまくやり遂げた後、満足感を言葉で表す。			
	3.回想を語る中で、自尊心を言葉で表現する。			
正常	1.グループ活動に参加して良かったという気持ちを、「また普段の自分に戻った感じがする」、「あまり寂しいと感じない」、もしくは他の肯定的な言葉で表現する。		0.756	0.078
	2.社会的正常さを次のうち一つあるいはすべてによって非言語的に表す：他人へ関心を持つ、仕事に対する集中力を保つ、動作・表情がくつろいでいる。感情的な反応が見られる場合でも、それが大きくなったり続いたりしない。			
	3.活動に加わったり離れたりする際、打ち解けた様子で周りの人とおしゃべりをしたり、握手したり、背中を軽く叩いたり、「さよなら」と言ったり会釈したりする。			
持続的 注意	1.活動中、10分間は集中して取り組むことができる。	0.687	0.253	
	2.活動中、計画や活動を続けるために、促しや指示の声がけを必要とする。			
	3.仲間もしくはファシリテーターに自ら話しかけておしゃべりした後、再び活動に戻って集中して取り組む。			
悲しみ	1.悲しみを示す指標 に明記されている特徴の1つあるいはすべてによって、活動中、悲しんでいることが根拠づけられる。	0.179	0.983	
	2.活動の途中で、悲しみを言葉で表現する。			
否定的 感情	1.活動中、怒っている。	0.074	0.217	
	2.活動中、興奮している。			
	3.「緊張している」、「不安だ」、「今日はおかしい」などと不安の気持ちを言葉で表現する。			
		固有値	3.857	1.068
		寄与率 (%)	54.817	15.251
		累積寄与率 (%)	54.817	70.068

【文献】Kinney, J.N., & Rentz, C.A. (2005). Observed well-being among individuals with dementia: Memories in the Making, an art program, versus other structured activity. *American Journal of Alzheimer's Disease and Other Dementias*, 20(4). 220-7.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	大山 良雄 (Ohyama Yoshio) (70334117)	群馬大学・大学院保健学研究科・教授 (12301)	
研究分担者	岡 美智代 (Oka Michiyo) (10312729)	群馬大学・大学院保健学研究科・教授 (12301)	
研究分担者	井上 映子 (Inoue Eiko) (80194059)	城西国際大学・看護学部・教授 (32519)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関